

介護実習指導のあり方を探る

— 実習施設指導者からのアンケート結果を踏まえて —

A Study of Carework Practice Teaching: with a Questionnaire to Spot Teaching staff

畠山千春*

Chiharu Hatakeyama

戸澤由美恵*

Yumie Tozawa

弓貞子*

Teiko Yumi

要約

本専攻が契約している実習施設の指導者を対象にアンケート調査を行い、102名から回答を得た。調査内容は、学生に関する事前情報、実習課題の内容や書き方、事前学習、介護技術、指導方法、実習記録などであった。目的は、実習指導の現状を把握し、学内の「実習指導」科目等の内容の検討、指導者との調整や連携のあり方を模索するためであった。

結果として、①実習プログラム作成や実習指導を行うために、学生の個人情報が必要としている、②社会的常識が欠如しているため実習が進みにくい、③介護技術では難易度に応じて経験の時期を配慮している、④約半数は記録時間を与えていない、⑤実習プログラムが施設の業務中心になりがちである、⑥介護過程の進め方についてカンファレンスでの指導が少ないなどの実態が明らかになった。

以上のことから、学生個々人の状況にあわせた実習指導を行おうとする姿勢はみられたが、今後さらに、学校側の意図している実習内容や進め方を明確にし、実習指導者との綿密な打ち合わせなど、共通の理解を図り実習の効果をあげることが必要となった。

キーワード：介護実習、実習事前指導、実習指導、実習記録、アンケート

* 社会福祉学専攻

目 次

- I はじめに
- II 現在の実習の進め方と実習指導について
 - 1 各実習段階とその時期および関連する授業科目等について
 - 2 介護福祉実践研究で進めている実習準備等について
- III 調査方法
 - 1 調査対象
 - 2 調査期間
 - 3 調査内容
 - 4 配布と回収方法
- IV 結果と考察
 - 1 学生に関する個人紹介票や実習課題などの事前情報について
 - 2 実習前に学習して準備をして来てほしいと思っていること
 - 3 実習の進め方や指導方法について
 - 4 実習記録について
- V おわりに

I はじめに

2年課程の介護福祉士養成指定規則では、総合計1650時間の授業時間が決められており、そのうち実習は450時間が当てられている。この1/4強を占める時間は、実践の学問である介護を学ぶものにとって、学内で学んだ基本的な知識や技術を踏まえた個人々人への介護を体験し、同時に、現実の介護からも刺激的に多くの学びを得る場となっている。それらには、生活の場である環境の理解、高齢者や障害を持つ方々の理解、介護者と利用者との関係、介護のあり方等々があり、正に実習は学生の全人的能力をもって行う総合的且つ統合的な学習といえる。

多くの学生は、学習を意欲的に進め、学びを着実に積み上げていくことになるが、年々、受身的な姿勢で学習ニーズも低迷・不明確であるなどの学生が多くなってきていると感じている。このような学生を含め、卒業と同時に国家資格を与える側としては、介護福祉士としての知識や技術などを学ばせるためには、今まで以上に学生の状態やレベルに合った教育方法の工夫が必要であると考えられる。また、特に実習では施設指導者の存在が大きな役割を果たしているため、その方々に理解が得られることも重要となる。

そこで今回、介護実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲおよび介護福祉実践研究Ⅰ・Ⅱ（厚生労働省指定科目の実習指導にあたる）の現行のやり方を見直し、改善策を模索することを課題とした。そ

れには、まず、各学年前期にある実習がより戸惑いが大きい状態に重きを置き、これらの実習が終了した時点で、施設指導者からの意見をまとめて現状を把握し、その結果から指針を得て考察することを考えた。

II 現在の実習の進め方と実習指導等について

1 各実習段階とその時期および関連する授業科目等について

表1に示したが、ここでの関連授業は「実習指導」と「介護技術」についてのみ現した。当短大では、指定科目である「実習指導」の科目を「介護福祉実践研究Ⅰ・Ⅱ（通称ゼミ。以下ゼミとする）」の科目名で行っている。なお、全科目と進度については、資料1にカリキュラム構成と介護実習の表を載せているので参照して欲しい。また実習時期については、暦によって多少のずれがある。

表1 各実習段階とその時期

学年次	1年次		2年次	
	第1段階		第2段階	3段階
実習名	実習ⅠA	実習ⅠB	実習Ⅱ	実習Ⅲ
実習時期	7月	2月	5～6月	9月
実習時間	88h	88h	120h	28h+40h
実習先	施設	施設	施設	施設+訪問
実習形態	集中	集中	集中+定期	集中
関連授業	介護福祉実践研究Ⅰ 介護技術（ベーシック） 〃（コミュニケーション）	〃ⅠB 〃（アドバンス）	介護福祉実践研究Ⅱ→……→……→ →	

2 介護福祉実践研究で進めている実習準備等について

ゼミでは、実習前の準備から実習中の指導、そして実習後のまとめまで、基本的には少人数に分かれて、「介護福祉ガイドライン」（以下ガイドラインとする）をテキストとして進められている。本稿では、実習前の指導内容を中心に、その中でも実習に直結した内容に絞り、調査内容との関連も踏まえて、ゼミの進め方や内容について記述した。

1) 個人紹介票と課題の準備について

実習の約3週間前の授業時間に書き方等を説明し、下書きを提出させる。担当教員は1・2度の面接指導を行い清書して完成させていく。施設へは1週間前に届くように郵送している。記入用紙は教員のコンセンサスの得られた指定の様式を使用している（資料2-①、②参照）。授業は各ゼミ毎に進めているので、教員の考え方による説明の違い、学生の理解度や能力による多少のバラツキ等々はあるが、概ね、一貫した指導内容となっていると考

えている。

2) 実習場での心構えや注意事項等の指導について

特に1年生については、「先輩から聞く」として卒業生から実習の心構えを聞く時間(1コマ90分)を入れている。その他には、上記個人紹介票等の準備と並行して、ガイドラインにある実習前・中・後に渡る「注意事項」を指導または確認している(1~0.5コマ)。この中には、実習中の態度や服装等いわゆる一般常識的なことも含まれている。

3) 実習記録について

実習記録用紙についても全教員のコンセンサスが得られているものを使用している(資料3-①、②資料4-①、②参照)。

介護実習記録II「日々の活動記録」は、1年生には、各ゼミで書き方を初めから指導している(0.5コマ)。2年生は、1年次での経験を踏まえ、内容や書き方の充実を意図して事前に復習している程度である。

介護実習記録III「利用者との関わりの記録」は、主にコミュニケーション場面の振返りを狙っている。1年生は初めてなので、この記録の書き方については、「介護技術II」(コミュニケーション)の時間で1コマ使って学習している。2年生については、介護実習記録IIと同様な復習程度で済ませている。

介護過程に関する記録は2年生のみで、1年次に「介護概論」(5~6コマ)と「介護技術III」(12コマ)で学習しているので、実習の進度に合わせながら記述させ、内容の理解と利用者の計画に合わせた記述ができるよう指導している。

III 調査方法

- 1 調査対象：当専攻の実習施設で実習指導を担当している指導者(生活相談・支援員、寮父・母、等)
- 2 調査期間：平成15年7月4日~7月31日まで
- 3 調査内容：調査紙(資料5-①~④参照)はA4紙4枚。内容は実習前準備と実習中の指導に関するものであった。質問項目は、1 学生に関する個人紹介表や実習課題など事前情報について 2 実習前学習と準備について 3 実習の進め方や指導方法について 4 実習記録について の4大項目と、それぞれに小項目を設定した。回答には選択肢を置いたものと、意見として自由記述を求めた形式の2通りであった。
- 4 配布と回収方法：調査用紙は、実習巡回教員から直接手渡しと郵送で配布した。1

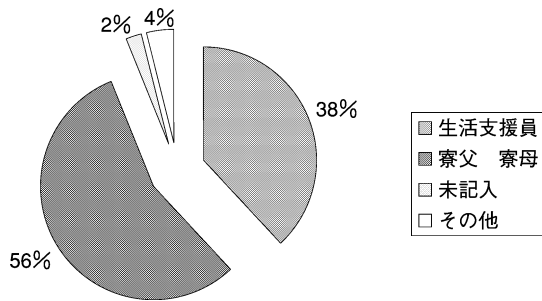


図1 記入者（障害者施設）

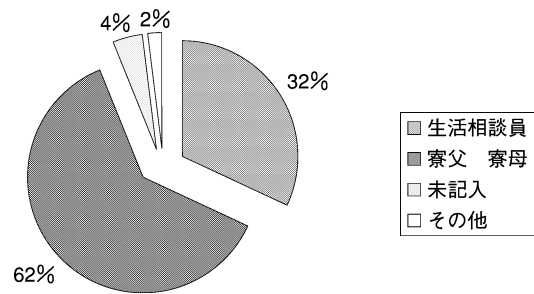


図2 記入者（高齢者施設）

表2

記入者	障害者	構成比	記入者	高齢者	構成比
生活支援員	18	38%	生活相談員	18	32%
寮父 寮母	26	56%	寮父 寮母	34	62%
未記入	1	2%	未記入	2	4%
その他	2	4%	その他	1	2%
合計	47	100%	合計	55	100%

表3

	障害	高齢	合計	1・2年	母数(合計+1・2年)
1年のみ	14	6	20	64	84
2年のみ	7	11	18	64	82

施設あたり3人に依頼（計126依頼）。回収方法は全て郵送。

IV 結果と考察

回収できたのは102（障害者施設47、高齢者施設55 回収率81%）であった。回収状況は表2の通り。内訳は1年生の実習IAのみを受け入れている指導者20、2年生の実習のみを受け入れている指導者18、1・2年生の実習を受け入れている指導者38であった。従って、母数は1年生84、2年生82である。（表3参照）

図1、図2は記入者の職種の割合をまとめたものである。障害者施設、高齢者施設の違いはあっても、職種の割合に大きな違いはなかった。両施設とも寮父母の記入者が56%、62%と多く、次に生活相談・支援員が38%、32%であった。

1 学生に関する個人紹介票や実習課題などの事前情報について

図3～図7までは個人紹介票の有用性についてまとめたものである。回答は、5「必要度が最も高い」から1「まったく必要としない」まで、5段階の回答基準を設けた。図3は5「必要度が最も高い」の回答結果であるが、2年生ではe「自己紹介」が30%、1年生ではb「取得資格」が25%と他に比べて僅かではあるが多かった。図4は4「参考にしている」の結果で、1年生はe「自己紹介」57%、2年生はb「取得資格」51%とこれも

a 施設までの所用時間	回答基準 5—必要度が高い 4—参考にしている 3—時々参考にする 2—あまり必要としない 1—まったく必要としない
b 取得資格	
c 今までの実習施設	
d 履修科目の状況	
e 自己紹介	
f 教員による紹介	

〈個人紹介票の有用性について〉

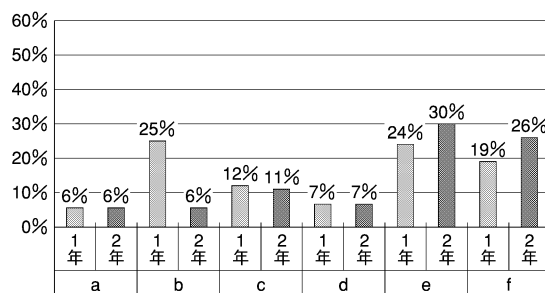


図3 5と回答した割合

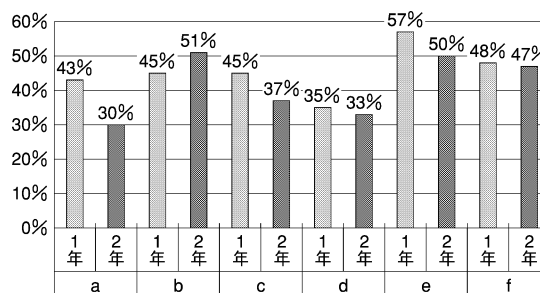


図4 4と回答した割合

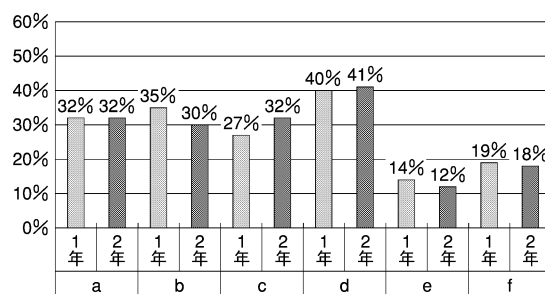


図5 3と回答した割合

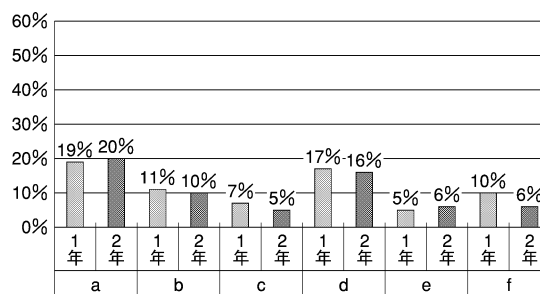


図6 2と回答した割合

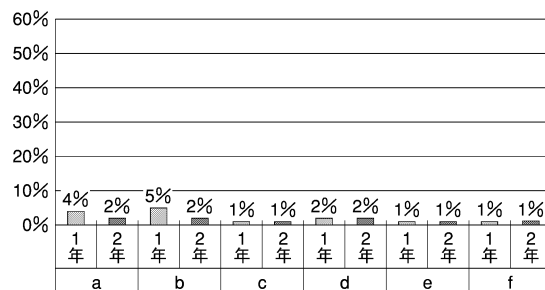


図7 1と回答した割合

僅かながらの差であるが多かった。、図5が3「時々参考にしている」の結果で、1・2年生共にd「履修科目の状況」40・41%であった。図6、7は2と1の「必要としない」項目の結果であるが、合計割合で1・2年生共a「施設までの所要時間」が23%、22%と多かった。

全体的傾向では「参考にしている」という回答基準3以上の図3から図5までを見ると、

全項目にわたって4「参考になっている」の割合が最も多くなっている。参考になっている割合の多い項目は前述した通り、自己紹介や取得資格であったが、f「教員の紹介」の項目が5と4の合計で見ると、2年生では73%と2番目に、1年生では67%と3番目になって続いている。このことから、教員の情報を指導に活かす意識が高いことが伺えるが、学生のプライバシーの問題に関することもあり、その内容や程度については難しさがある。

1年生と2年生を比較すると、2年生よりも1年生のほうが自己紹介票を参考になっている割合が多くなっている。これは、1年生の実習を受け入れるにあたって、よりきめ細かな指導体制と学生の状況にあわせた実習プログラムを作るためと解することができる。以上のことは自由記述の中にもあらわれている。「自己紹介の記述が簡潔すぎる」「長所・短所についての記入」「教員による紹介の内容が多いと、指導する側が学生を把握しやすい」などの記述にもあるように、個人情報とは時々参考にする程度のものでなく、実習指導者にとっては常に参考にする情報であることが明らかになった。

また、取得資格や履修科目の状況という項目の割合が多かった。なぜこれらの項目の割合が多いのか、今回の調査だけでは断定的なことはいえないが、「学習態度や学習能力」「学力（学内の成績等）」「知識・技術の認知度が分かると予定が立てやすい」などの記述が見られることから、学内で学んだことを実践するという実習の目的を達成するため、学生個々の学習状況を参考にして、実習指導を行おうとする施設側の姿勢のあらわれと見るべきであろう。

自己紹介や学習状況についての情報はもちろん、「自己紹介票に盛り込まれている情報が充実しているので非常に助かっている」という自由記述にもあるように、学生個々人に関するより多くの情報を求めていることがわかる。このことは、学生個々人の情報を実習プログラム作成に生かし、個別的できめ細かな実習指導を行っていく上で重要な情報源の一つとして求められていることの現れである。

図8は実習課題の内容や書き方についてまとめたものである。a～dは指導に参考になっているか否かの項目であり、f～jは書き方についての項目である。回答は1年生、2年生に大きな違いはなかった。a「随時指導に活用している」という項目が67%、63%と最も多く、続いて、h「課題、理由、行動目標に分かれていて分かりやすい」44%、43%、c「実習予定表の作成に役立っている」36%、38%と多くなっている。

このことは、「具体的に目標を書いていただくほど指導しやすい」、「これだけはやりたいというものを小さなことでも具体的に書いてほしい」という自由記述にもあるように、実習プログラムに実習課題や学生が知りたいと思っていること、経験したいと思っていることなどを活かし、より効果的に課題が達成できるようにという配慮の現われと言えよう。また、「具体的に」書いてほしいという自由記述があるが、実習全体の目標や課題を達成するための具体化として行動目標や日々の目標を立てており、それら目標の関連性について

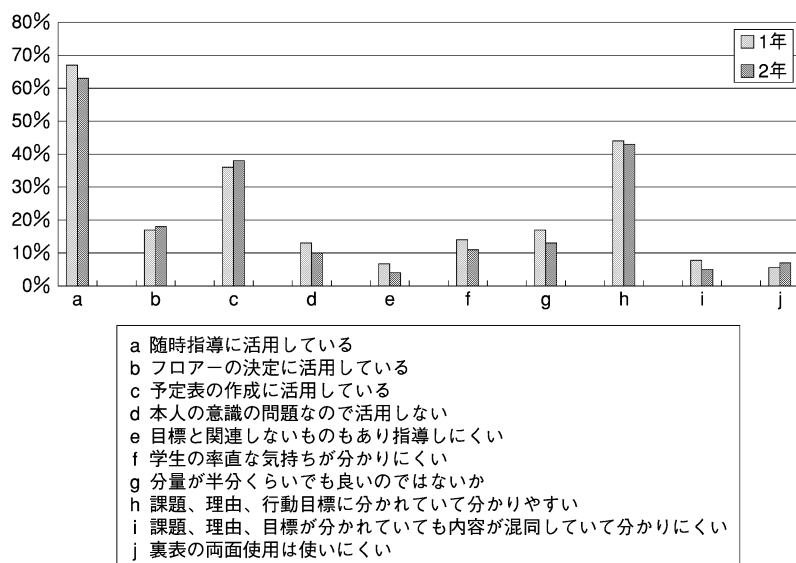


図8 実習課題の内容や書き方について

理解してもらう必要がある。

一方、自由記述にあるように「学校側の学習目標が少し高いように思う。行動目標を進めていくのは学生それぞれの力である」という記述は、学生個々の力量に応じた事前の教員による指導について言及したものと受け止めている。また、学生の実習課題と施設側のプログラムのずれを指摘する記述があった。今後、施設との懇談等を通して互いに理解を深め、より良い実習環境を作るために一層の努力が必要である。

2 実習前に学習して準備をして来てほしいと思っていること

図9は挨拶・返事・態度・言葉遣いなどの社会的常識の学習についての回答をまとめたものである。回答基準は、3「強く思う」から1「そう思わない」まで3段階とした。1年生の指導者76%、2年生の指導者の66%が3「強く思う」と答えている。自由記述によれば、「できる学生とできない学生がハッキリと別れている」、「貴学の学生だけではないが

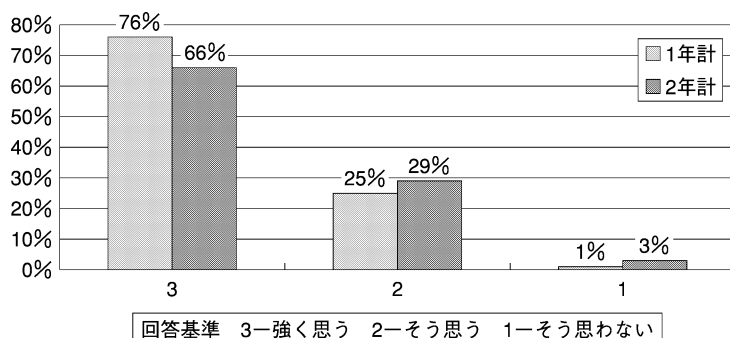


図9 社会的常識の学習

介護を教える前に社会的常識の指導に時間を費やす方が多い」とまで言う指導者もあった。その中で「学習して身につけることではないが最近の学生には必要」という指摘もある。

本来、挨拶や言葉遣いなどは基本的な生活習慣とも言われ、それは家庭生活の中のいわゆるしつけの部分である。挨拶や目上の人への言葉の使い分けは、できる・できないというものではなく、することが当たり前であった。さらに、「社会的常識のない学生は利用者との関わりも悪く信頼関係もできにくい」との指摘もあり、挨拶や言葉遣いは、職員のみならず利用者からの信用度の判断基準にされていることは多分に理解できる。

以上のことから、本専攻学生ができていない現状を認識した対応が必要である。まずは常日頃から学内教職員との関係を見直し、授業を通して実践をはかっていくことが考えられる。ゼミや介護技術（コミュニケーション）といった授業の中で返事・歩き方・行動等のロールプレイを試みるのも1つの手段ではなかろうかと思う。

さらに、事前学習と言うよりは事前指導として「服装やアクセサリ」のチェックをして欲しいという意見もあった。本専攻ではこれまで、実習着・エプロンは学校指定のものがなく、学生の判断に任せていた。また、アクセサリや頭髪の色についても大まかなラインの確認だけで、とりたてて指導しなくても学生の判断でクレームのつくことは少なかった。

自由記述に、言葉遣いで複数の指導者から挙げられた中に、「長い実習では馴れ馴れしくなってしまう」「2年の方が言葉の乱れを感じる」ということがあった。「親しき仲にも礼儀あり」は死語なのか、お客様とサービスをする側という概念が薄いから関わる時間の長さに比例して乱れてくるのであろうか。実習経験に伴う問題としてその学年・段階ごとに対応を考えていかねばならないこともあるという認識を新たにした。

実習への心構えや姿勢については、僅かであるが「やる気や姿勢が伝わってこない」「施設内講義中に居眠りをする」があり、学生の表現力やコミュニケーション能力の不足なのか、あるいは動機付けや教えるものとしての意識が欠落しているのか、学生個別の対応が必要に思う。

図10・11は基本的介護技術に関する回答である。1・2年生を総じて比較してみると、介護技術に関して3「強く思う」・2「そう思う」の割合はすべての項目で2年生が多い。その中で、1年生の3「強く思う」が低い理由としては、いくつかあげられる。入学後3ヶ月という時期で実習に来ていると言うことが指導者にもよく理解されており、短期間の授業で学べることの限界からくる期待の低さ等が考えられる。2年生が総じて高い理由としては1年間の学習と実習の経験から求められる様々な到達度や期待が高いことの現れと思われる。

学生の介護技術の習得に、ばらつきや個人差があるのは確かである。それは能力的な問題もあるが、1年次の実習施設による影響も考慮に入れる必要があるだろう。例えば、介護度

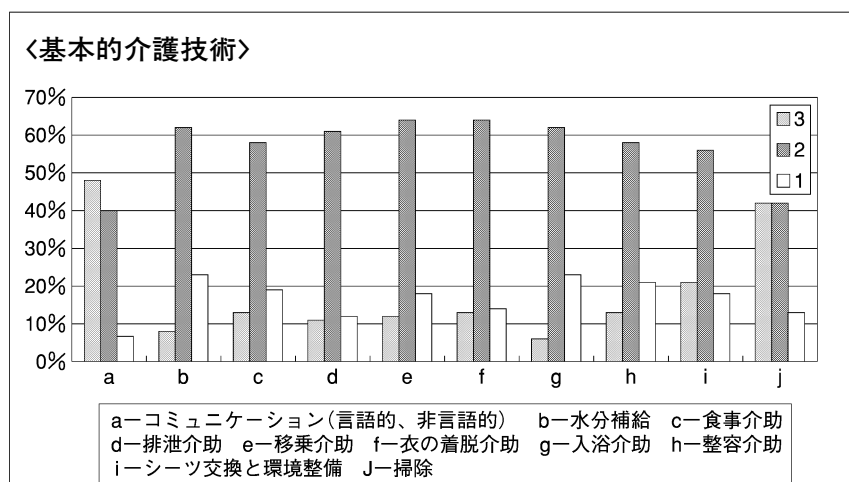


図10 1年 項目別回答基準の割合

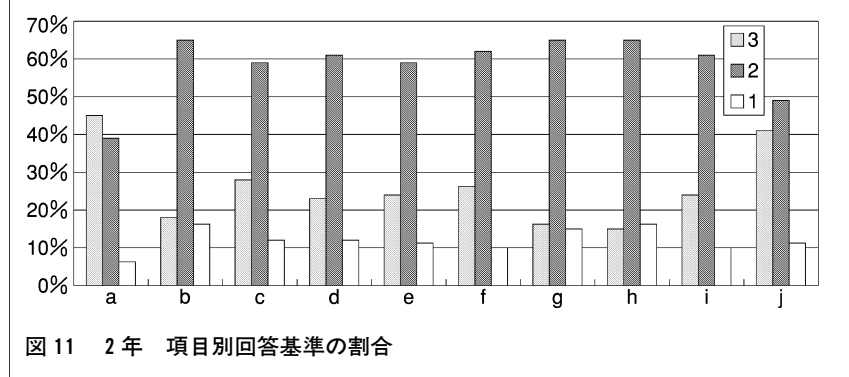


図11 2年 項目別回答基準の割合

の低い救護施設のようなところであれば、技術習得の機会はずと少ない。また、施設の方針によっても介護技術の経験は少なくなる。指導者から要求される期待や到達度についても客観的に測れないという問題も存在するが、国家資格を持つことになる学生への期待や熱意ともうかがえる部分もあり、情報交換や両者の調整も必要性を感じた。

次に、基本的な介護技術等についての学習について3「強く思う」が突出している項目は1・2年共に「コミュニケーション(言語的・非言語的)」、「掃除」の2項目であった。

「コミュニケーション」は1年の指導者48%、2年の指導者の45%が3「強く思う」と答えている。

確かにコミュニケーションは、初めて会った方、ましてや障害を持っていたり生きてきた時代や年数に開きがある方と、意図的にその場の状況に合わせて話しかける、ということは本当に難しいことである。会話(社会情勢・年齢差等の話題の選択)や歌(好みに合わせたジャンル等)についても学習で補える部分もある。せめて自己紹介や挨拶、天気や食事の話題など自分から話しかけられるような状態にはしておかねばならないと考える

次に多かった「掃除」は、介護技術のカリキュラムには入っていないが、生活の場としての施設にとっては重要と見ていることがうかがえる。先述の社会的常識として、つまり、

自然と培われていくことと考えられる項目が最も高い数値を示していることに困惑を覚える。対応策としては関連する「家政学実習」等の授業の中に積極的に取り入れたり、「介護技術」演習後の物品の片づけ・教室清掃等で細かく指導していくことも考えられる。いずれにしろ、社会的常識も含めてできていないことはそのまま受け止め、できないところからの指導が要求されていることが明らかになった。

また、介護技術全般に「基礎は学校で、応用は施設で、と考えている」といった意見も複数あった。本学としては実習直前にレビューをさせ、基礎だけは頭に入れて出すことが重要との認識を再度深めた。このことは、施設のみならず学生にとっても、基本の確認ができる、不安の解消と自信につながる等のメリットも考えられ、スムーズに実習に入る一助となろう。

3 実習の進め方や指導方法について

図 12 は 1 年生、図 13 は 2 年生の援助技術の指導時期についての指導者の考え方についての結果である。技術指導の開始時期は 11 項目中 10 項目が 1・2 年生共に似た傾向の結果になっている。傾向は同じであるが、早くから経験させている各技術項目の割合は全項目において 2 年生の方が多かった。この中で学年による違いがあったものが 4「排泄介助」1 項目であった。4「排泄介助」では、1 年生は b「ある程度進んでから経験」させている回答数が 61%と a「1～2 日から」の 3 倍弱多かった。それに対して、一方の 2 年生は a b の回答数は同数の 44%であった。

実習初期から経験させている項目は、1「コミュニケーション」、2「水分補給」、3「食事介助」、8「整容介助」、9「シーツ交換」、10「環境整備」、11「掃除」で、この中で最も多かったのは、1・2 年生共にコミュニケーションの項目であった。一方、ある程度進んでから経験させている項目では、5「移乗介助」、6「着脱介助」、7「入浴介助」、と 1 年生の 4「排泄介助」で、最も多かったのは、1 年生が 4「排泄介助」61%で、2 年生は 7「入浴介助」66%であった。

以上の結果から指導者側には、技術の難易度と学年により、技術経験の時期を考慮していることが明らかになった。学生にとって技術の学びは、できたかできなかったのか結果が見えやすく、学習意欲や自信にも繋がりやすい点がある。従って、段階的に習得できるという事は重要な配慮であると考えられる。

今回、指導者の技術に対する全体的な考え方は理解できた。細かく言えば技術指導のやり方は様々にある。今後、利用者を一様に習得させるやり方からある程度絞った対象者で体験させるやり方、同学年の中でも個々の学生のレベルやニーズに合わせた指導基準の明確化等、さらに効果的な指導のあり方についても考える余地が出てきた。

図 14 は経験項目の入れ方等に関する配慮についての結果である。1 年生 61%、2 年生

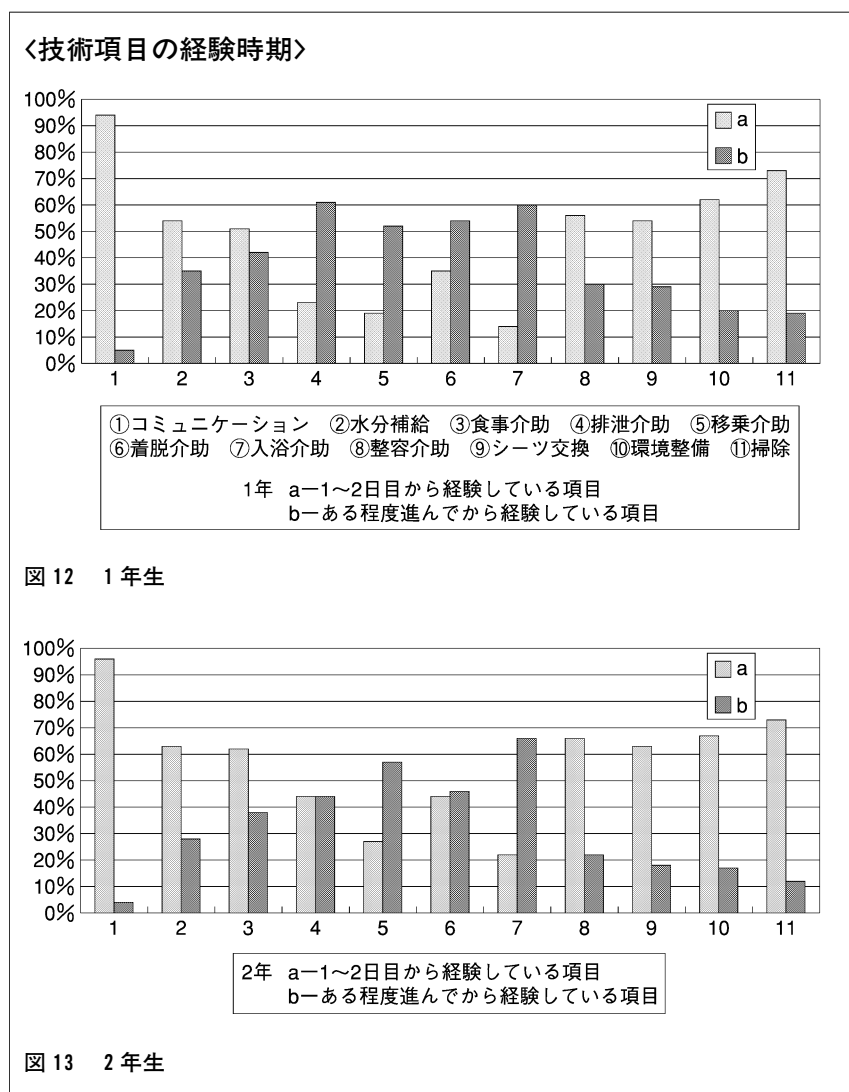


図12 1年生

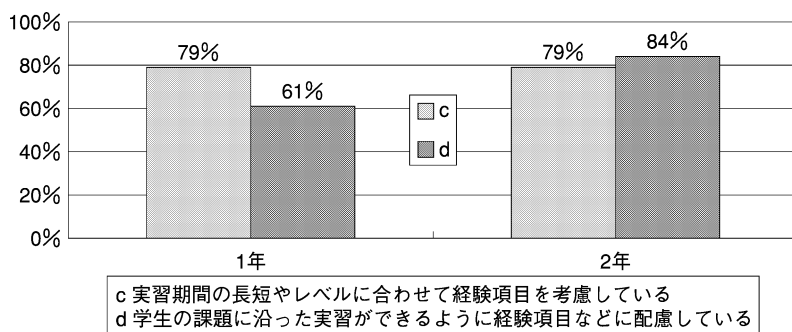


図14 経験項目の入れ方

84%の結果となっていて、それぞれに考慮されていることが分かる。d「課題に沿った実習への配慮」が1年生79%に対して2年生が84%と多いが、2年生は1年次の経験を踏まえた自己の課題がより明確であることや、実習期間が長いことを考えて、指導者側が学習

ニーズに応じた実習内容を配慮しているものと考えた。

図 15～21 までは、実習の進め方についての方法別項目による 2 者択一方式での回答結果である。未回答や両方に回答したものは無効と処理したので若干の誤差が生じている。

図 15 は学生の日々の実習目標の伝達や調整についてであるが、僅かながらも 1 年生では B 「状況によって聞く」やり方が 50%と多く、2 年生では、A 「朝の内に必ず行う」方が 50%と多くなっている。2 年は図 14 の結果でも述べたように学生の課題に沿っての配慮が行われている状況にあることから、その日の朝に調整が必要になるということでこの結果になったことが考えられる。

学校側としてはその日の早い時点で、必ず目標確認や調整を入れてほしいと考えるが、結果では半数程度であった。これは、指導者側の業務の忙しさや必要性の認識の違い等があると推察される。この点については、現場の指導者の考え方や状況を聞いた上で、今後の対応策の工夫も含めた検討が必要と考える。

図 16 は実習フロアを限定しているかどうかについての結果である。1 年 49%、2 年 51%と僅かではあるが C 「フロアを決めない」が 1・2 年生共に多い。しかし、2 年生の方が一方の D 「決める」との開きが 7%と大きかった。全体を知る上でフロアを決め

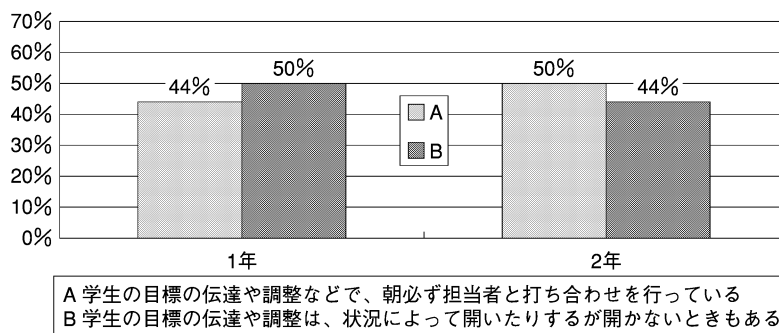


図 15 実習目標の伝達や調査

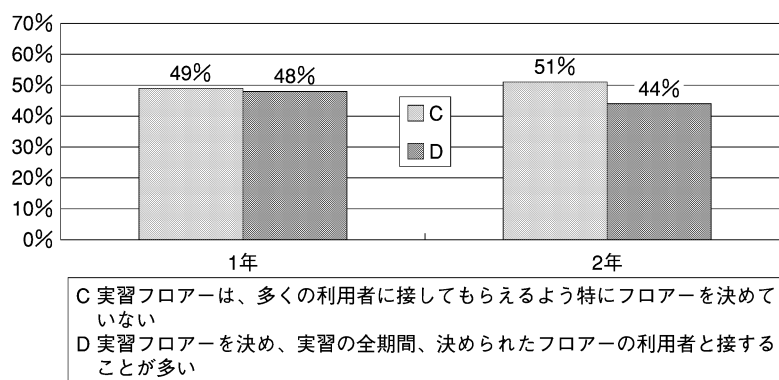


図 16 実習フロアについて

ない利点はあるとは思いますが、その日によって場が違うということで、学生にとっては利用者や指導者についてなど、より多くの情報とやり方を頭に入れる必要が生じることになる。特に2年生は対象者を決めての介護過程の実習にも力点を置いていることを考えると、非常にやり難いことにならないだろうか。また1年生は、実習I Aが2週間と短期間であり、さらに初めての経験で何事にも不安がある状況を考えると場が変化することからくるストレスを克服して成果を上げるにはかなりの努力が求められることが予測される。

従来、学校側では施設のフロアーのことまで細かく打ち合わせに入れていることが少なく、指導者の判断に委ねている場合が多かったように思う。しかし、今後は実習のそれぞれの目標や内容と学生の課題等を考慮に入れた環境設定ということが重要になると考える。学生にとってはフロアーによって学習内容が左右され兼ねないことや、実習の達成感にも関係してくることがあることに注目して、学校側の考えを打ち出し、さらに、指導者側の意見を求めて対策を講じて行く必要性が明確になった。

図17は実習指導者が全員か、ある範囲の人数であるかについての結果である。E「交替して担当している」方が1年生55%、2年生50%とやや多くなっている。図16の結果でフロアーを固定しないやり方が多かったのでそれに対応した必然的な結果がここに現われたと理解できる。現場では実習指導者として専従にすることはとうてい考えられない現実ではあると思うが、F「一定の指導者による担当」に1年生40%、2年生44%の回答があることから、ある程度の配慮を持って実施されていると解釈できる。今後、さらにより効果的な実習に向けた指導体制作りを、現場指導者の了解が得られる形で打ち出せることが必要である。

図18は指導者が実習予定表作成に当たって、業務経験を知ることを念頭においているか、学生の状況に合わせて変更しているかの問いである。結果は1年生が61%、2年生が55%と共に、G「一通りの業務体験に重きが置かれている」が多かった。特に1年生では一方のHとの差が約2倍になっていた。Gの設問表現にやや曖昧な部分があったため意図通りに解釈されたか疑問は残るが、この結果から介護実習が業務経験に重きが置かれている実

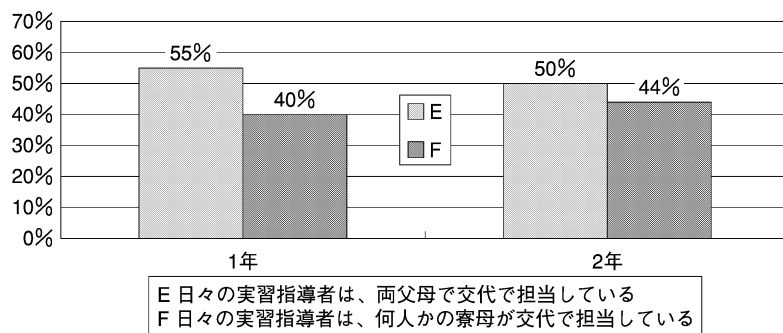


図17 実習指導者について

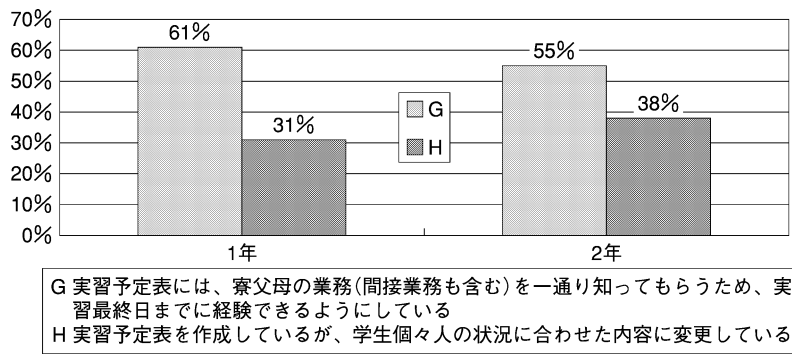


図 18 実習予定表作成について

態がある程度現われたと解釈できよう。

殆どの実習施設においても、学生がある指導者にぴったりつく形で指導を受けている。これ自体は学生には自然な指導方法であるが、問題は、必ず指導者と一緒に最後まで業務に沿って進むのか、それとも途中から学生の学習したいものに移れるかということにあると思う。業務から離れた途中からの学習には、レクリエーションの参加やコミュニケーションや介護計画の取り組みなどが挙げられよう。こういったことが許されるかどうか、また許される割合がどれくらいあるのかということであるが、学生にとっては実習への意欲等に大いに関係してくるのではないだろうか。

学生によれば、場に慣れて援助がスムーズに行えるようになると、職員から労働力として期待されていることを現実を感じるという。これは学生の誤解というか、錯覚だと説明して良いのかどうか迷うことがしばしばである。実習は誰のための学習で、何のために行われているのかと、いまさら言うまでもないことだが敢えてここから考えなければならぬ現実なのかも知れない。ともあれ、これについても従来では、おそらく学校側から細かな方針や進め方等が伝えられず、多分打ち合わせもここまで行われていなかった。現場の指導者の良かれと思った判断で進められて来た指導方法が、習慣化し実習指導の形が整えられてきた経緯が理解できる。相手を責めるよりも学校側の責任と言えよう。

この先、実習という教育や指導のあり方について、学習する内容の明確化や、仔細な進め方の検討を行い、伝達し相互理解が図られれば改善が期待できるであろう。

図 19 は実習予定表作成に当たって、介護技術とコミュニケーションの経験の比重をどちらに置いているかについてである。僅かに J 「コミュニケーション」が多かった。指導者側が利用者とのコミュニケーションに重きを置いている考え方から、学生にその重要性を体験させることに意義ありとした結果であろう。しかし、図 18 の結果であった業務に重きおかれた実習との間で矛盾がないわけでもない。図 19 の結果を持ってすれば業務から外れたりしながら、学生がコミュニケーションに時間を当てることは難しいことではないといえる。

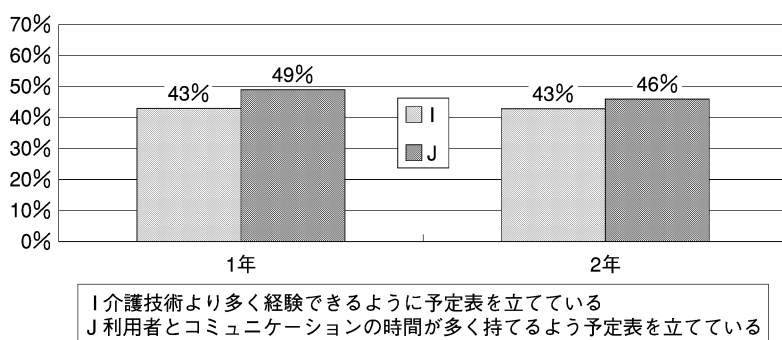


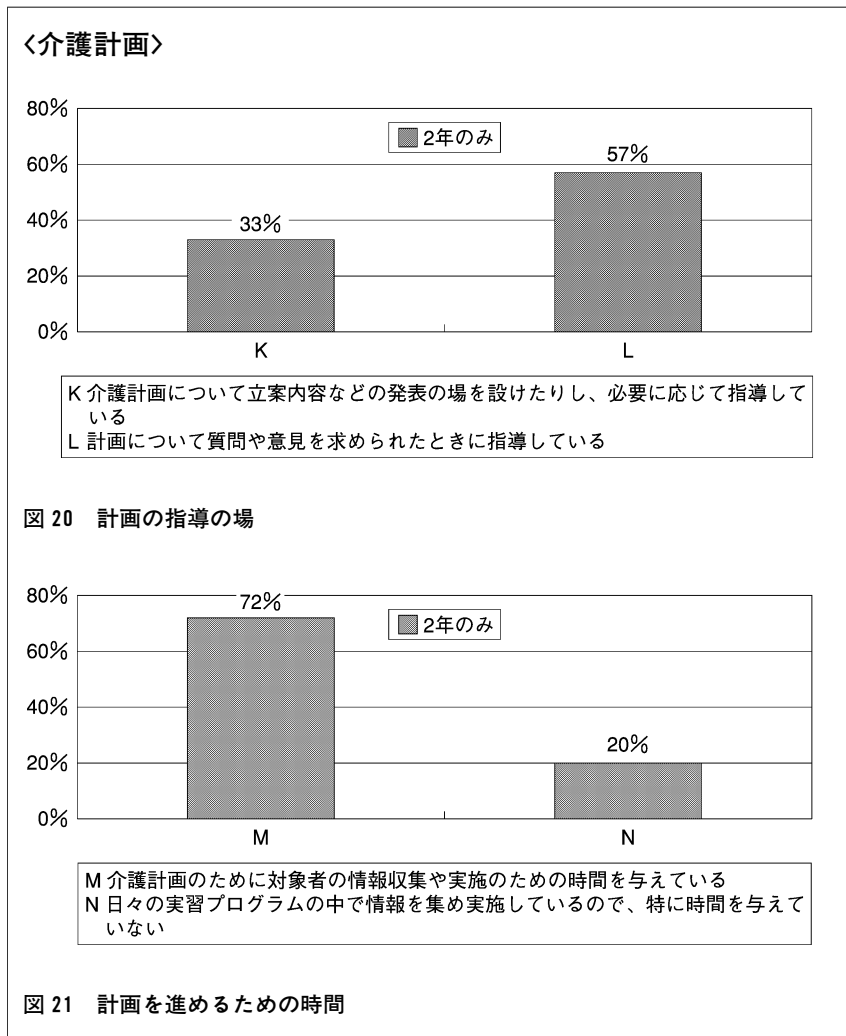
図19 実習予定表作成について

図20・21は2年生が実施している介護計画の指導体制についての回答である。

図20ではL「学生からの指導ニーズがあれば指導している」が57%で、K「発表の場を設定したりして指導する」33%を約2倍に引き離して多くなっている。主体的な学習という点では本人の疑問の有無によって指導する考え方は大切であるが、学生にはカンファレンス等の場で発表の機会が設定されることで、それを目安に意図的な取り組みを意識させる効果がある。学校側ではそれをねらって、発表の場をプログラム例に組み込み、提案していた。この結果からこの提案が現場に浸透し切れていないということが明らかになったと言えよう。学校側の打ち合わせやカンファレンスの時間設定等調整時に、その意図の伝達が不明確だったことがまず挙げられる。さらに、介護計画を進めることの意義に対する指導者との考え方の相違である。数年前までは、学生に介護過程を学習させる必要があるのか、可能なのか等々意見がいろいろあったが、介護保険や支援費制度が導入された今日ではその意見は少なくなっているため理解に大差はないと考える。

短期間で介護過程を学ばせるにあたっては、対象者の理解や計画の妥当性等、指導者のアドバイスや理解なしには前に進められないことばかりである。その状況から、発表の場と称して、実はその場で多くの指導を頂くことを考えているのがこちらの意図であると理解して頂けるよう努力が必要となろう。

図21は介護計画を進めるための時間が与えられているかどうかについてである。M「与えている」が72%に達していて、N「与えていない」20%とで大差になっている。この時間的配慮は学生には進めやすいことであるが、時間的にどの位か、どんな時に与えられているのかなど細かな状況は不明である。図20の結果と照合して見ると、指導者は、学生が進めるための時間は与えているが、指導者側が相談に乗ったり、アドバイスをする等の時間の設定まではできない現実にあると解釈できる。いづれにしても今後に向けて前述の通り、さらに時間の取り方等も含めて、効果的に進めて行けるための調整が必要とされている。



4 実習記録について

図 22 は毎日の実習記録時間をどれ位与えているかの回答である。1・2年生共に 30 分が最も多く 1 年 22%、2 年 27%、次いで 60 分で 1・2 年共に 16%となっていた。この箇所

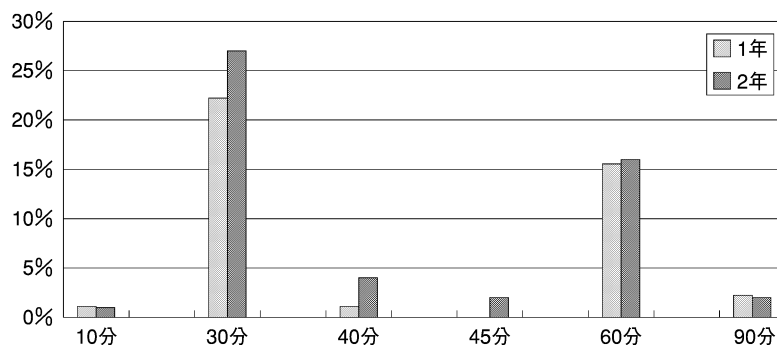


図 22 実習時間内の記録時間

では、未記入が1年で58%、2年で48%と半数前後と多くあったため、割合が他の結果に比べて非常に低いものになっているのが特徴である。この未記入については記録時間なしという回答であるとの解釈が成り立ち、半数前後の指導者が記録時間を与えていないという結果になる。学校側では、30分～45分前後の記録時間を与えてほしいと打ち合わせを行っているが現実はこの通りであった。与えることの意味を説明して理解して頂いてないか、指導者側には別の考えがあって記録時間を設定していない等、相互に見解の相違があることが充分推測される。記録の不備や不十分さが指摘されている学生の状況とこの実態からの指導者側に理解を得て改善策を講じる必要がある。

図23・24は実習記録の指導についての回答である。図23「日々の活動記録」のb～eまでは、記録に対する指導者の考え方や対応に関連しているが、この中ではe「その場での指導に重点を置いている」が1年生57%、2年生が60%と共に多くなっている。その場での指導は、時をおかずにすることで指導内容が明確にでき、学生にとっても疑問にすぐに答えてもらえるなど効果が大きい。また、その重要性に気づかずに記録に書かないことも考えられるので妥当な指導法である。しかしこれだけで、後で出された記録のコメント欄への記入が不要になるかどうかは別問題と考える。

指導者は業務の傍ら学生の記録を読んで指導するという状況にあるので、c「苦痛」やd「時間がない」という回答は、複数の養成校からの実習生の受け入れや業務を伴いながらの指導の現状を考えると、正直な気持ちと解釈する。1・2年生共に3日以内に記録を返すが46%。49%となっており、努力していただいていることは有難いことである。自由記述欄にはその日のうちに返しているという意見もあり、学生にとってはその場で指導を受け、整理して記録に書き、返されたコメント欄を見てすぐ翌日に活かせるという理想的な実習指導を受けている者もいるのである。そこまでは負担が重くなり無理にお願いはできないが、コメントは学生には気になるものであり、その言葉が励みになり内容の積み上

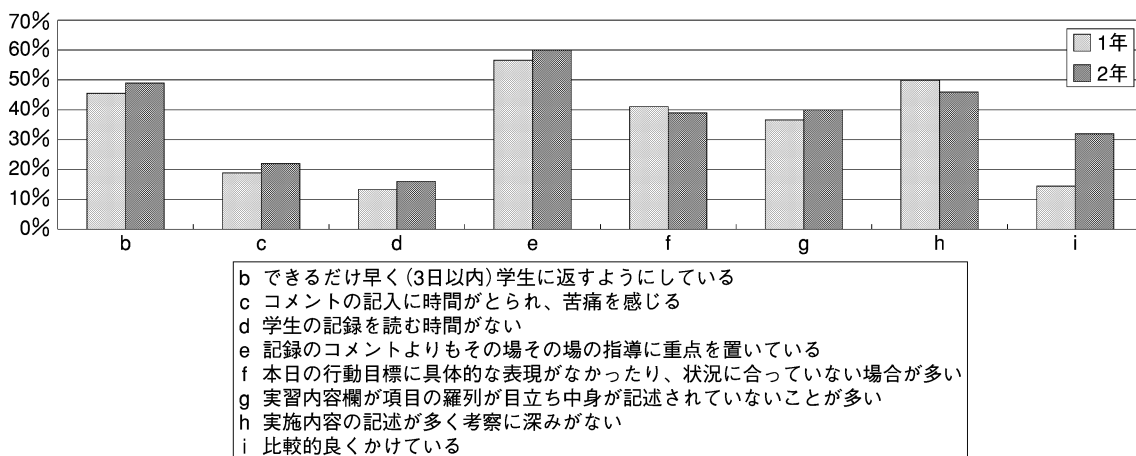


図23 日々の活動記録

げに繋がって行くことは確かであることから、時間をかけず、時間を置かずにできる方法についても工夫の余地がある。

f～iまでは、学生の記録内容に関する答えである。f～hまでは、記録内容の不十分さに対する回答であるが、1・2年生共に傾向は似ていてその割合は37%、50%の間であった。つまり、1・2年生共に半数近くの方が問題を感じている意見であるとの認識が必要である。

iは「良く書けている」という肯定的な意見であるが2年生の方が1年生より倍以上多くなっている。そこはやはり2年生の成長が認められたと解釈できるが、それにしても32%と少なく、記録内容に問題を感じている指導者が圧倒的に多いことを肝に銘じる必要がある。

一方、「関わりの記録」についての結果が図24であるが、j「分かりにくい」記述やk「考察欄が不十分」では、1・2年生共に後者の方が多くその割合は31～32%になっている。最後のl「良く書けている」の回答は、14～26%で低い値であった。

これを前述の「日々の活動記録」と比較してみると、関わりの記録の方が不十分さが少なく良く見られているのに対して、十分さはその逆で日々の活動記録の良が多くなっている。しかし、その割合は微妙なものなので何とも言えない。いずれにしても指導者から見ると、「関わりの記録」と「日々の活動記録」の両方の内容面の記述において不十分さを感じている結果となっていることは明らかである。

多数の自由記述の意見の中には、内容以前の誤字脱字のことや言葉遣いなどの基本的なことから、日記調的な経過記述や単調な内容の繰り返しなど深まりや考察が見られない等の意見が多く寄せられた。これらの問題は、テクニック上のこともあるがむしろ、記録の目的や意味が分かっていないことからくる抜本的なところにあるのではないかという指摘は、同感である。

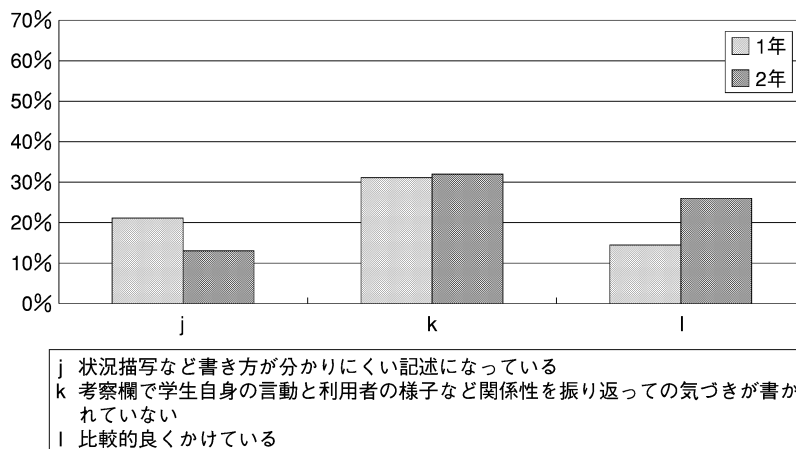


図 24 関わりの記録

以上の結果とその他の意見とを照合せながら考察すると、記録時間の有無や長短は別にして、指導者側として記録が不十分であるが故に、必要以上に負担を与えていることが明らかになった。実習に出る前にゼミでできる指導内容や方法についての点検が必要である。それによって、学生の記録内容のレベルの向上が見られ、記録の意味を理解した的を絞った考察に発展できれば、指導者側のコメントについても時間をかけずに書けるということはあるであろう。その意味では、今後、学生のレベルに合わせた様式の検討も必要になる可能性もある。学生の記録内容の充実、それは取りも直さず、指導者側の記録にかかる負担軽減に繋がるばかりでなく、指導者の達成感にも通じるものであろう。

現在の介護実習の指導体制から考えると、現場指導者にどれだけ実習指導への理解と協力が得られるかによって、良い学習ができるかどうか左右される状況にある。従って、学校側での実習方針や方法などについてきめ細かな連絡と調整が重要になることを改めて認識していくことが必要である。

<まとめ>

- 1) 個人紹介票や課題の有用性については、必要度が高い項目は「自己紹介」、「教員による紹介」であり、学生の個人情報を探していることが明らかになった。
- 2) 実習課題を随時活用しようとする配慮が見られる。
- 3) 挨拶や言葉使い等の社会的常識が欠如しているため、実習がスムーズに行かない現状が明らかになった。
- 4) 介護技術（コミュニケーションを含め）は、基本の理解を徹底させることが求められている。
- 5) 介護技術の難易度や学年による経験時期を考慮している。
- 6) 朝の時点で調整を行う進め方がほぼ半数で、実習するフロアーや指導者を固定しない方が多かった。
- 7) 業務の流れに重きが置かれた実習方法が多く、学生の目的に合わせた実習が難しい。
- 8) 2年生の介護過程の進め方については取り組みの時間の配慮はされているが、カンファレンスなどでの指導が少ない。
- 9) 記録時間に関しては半数与えられていない実態であった。
- 10) 記録の指導では時間がなく苦痛を感じている中で、努力してコメントを書くようにしている。
- 11) 関わりの記録、日々の活動記録共に不十分で充実するよう求められている。
- 12) 実習に対する目標・課題については、施設と学校との間に微妙な理解の相違がある中で、一層の連携を図り、懇談等で互いに理解を深める必要がある。
- 13) 不足する学生の社会的常識を補う指導を施設と学校の両方で行う必要がある。
- 14) 学校側の意図している実習内容や進め方などを明確に打ちだし、きめ細かな打ち合わせ

せが大切である。

15) 実習前のゼミの指導方法に、学生のレベルに合った工夫が求められている。

V おわりに

今回のアンケートを通じて、施設や指導者それぞれに事情はあるだろうが、学校側の意図に添うよう実習指導に努力をされている意欲を強く感じた。その一方で、実習と言う名目で現場の業務に学生が駆り出されているような、実習は何のために行っているのか考えさせられるやり方も感じる部分が無かったわけではない。さらに、指導における厳しさは大切であるが、将来の職員を育てるという温かい眼差しと気持ちを向けて欲しいと思うこともあった。

ともあれ、率直なお答えを頂き、見えてきたことが多く感謝している。今回の結果を年1回行われている実習懇談会に報告して意見交換ができれば、お互いの理解がさらに深まる機会になろう。それをもとに引き続き良い実習教育のあり方を探求して行きたい。

参考文献

- (1) ①高山直子 ②授業の活性化に向けての一考察～実習指導にラベルワークを導入して～ ③介護福祉教育 ④第8巻 第2号 2003.3
- (2) ①末廣貴生子 ②介護福祉実習終了後の評価からの考察～介護福祉実習指導の授業展開と介護福祉実習について～ ③介護福祉教育 ④第9巻 第1号 2003.7
- (3) ①柗崎京子ら ②介護実習における学生の不安(1)～実習に対する不安内容の整理と質問項目の抽出～ ③共栄学園短期大学研究紀要 ④第17号 2001.3
- (4) ①戸澤由美恵ら ②介護実習における学生の不安(2)～始めて介護実習に臨む学生の調査結果～ ③共栄学園短期大学研究紀要 ④第17号 2001.3

〈資料1〉

カリキュラム構成と介護実習

年次	1年次		2年次	
	前期	後期	前期	後期
基礎教養科目 (1・2年次共通開講、 時期は、前・後期のどちらか)	社会学* 法学(含憲法)* 心理学* 福祉と住環境* 人間とエコロジー* 人間と宗教* 人権論* 国際理解* 生活と福祉* コミュニケーション* インターメディア* コミュニケーション* 新聞の読み方* 語学系 基礎英語* 英会話* インターネットの英語* 資格英語* スポーツ系 体育実技(1年・前期開講) 生涯スポーツ*(2年・後期開講) 保健体育理論*(2年・後期開講)			
	社会福祉概論 障害児者福祉論(bクラス) 社会福祉史*	介護概論 高齢者福祉論 障害児者福祉論(aクラス) 児童福祉論*		
本質・目的の理解	家政学概論I 医学一般I	家政学概論II 医学一般II		
対象理解	レクリエーション概論*	レクリエーション活動援助法I		
内容・方法の理解	介護技術I(ベシック) 介護技術II(コミュニケーション)	介護技術III(アドバンス) 形態別介護技術(高齢者)I 形態別介護技術(障害者)I 家政学実習I(被服・住居)	レクリエーション活動援助法II 社会福祉援助技術論	社会福祉援助技術演習 社会調査* ケアマネジメント* 援助技法*
基礎技能・技術			形態別介護技術(高齢者)II 形態別介護技術(在宅) 家政学実習II(食物)	形態別介護技術(障害者)II
介護実習・統合科目	7月 介護実習IA 介護福祉実践研究IA	2月 介護実習IB 介護福祉実践研究IB	介護実習II(5~6月) 介護福祉実践研究II	9月 介護実習III

*選択科目

<資料4-①>

介護実習記録Ⅲ (利用者とのかわりの記録) 実習1A, 1B, II, III

学籍番号		氏名			
月	日	利用者	性別	年齢	歳
とりあげた場面					
とりあげた理由					
利用者の様子・言動		私を感じたり考えたこと		私の言動	

共栄学園短期大学

<資料4-②>

利用者の様子・言動	私を感じたり考えたこと	私の言動
考 察		
実習指導者のコメント		
指導者サイン		

<資料5-①>

共栄短大介護実習等に関するアンケート 2003.7.1

施設種別	特養 老健 療養 救護 重心
アンケート記入者	生活指導員(相談員) 寮父 寮母
受け入れ学生	1年生 2年生

I 学生に関する個人紹介票や実習課題などの事前情報について

① 個人紹介票に現在設置している各項目についての有用性などお答え下さい。

回答基準 5ー必要度が最も高い 4ー参考になっている 3ー時々参考にする、
2ーあまり必要としない 1ー全く必要としない

- a 施設までの所要時間
- b 取得資格
- c 今までの実習施設
- d 履修科目の状況
- e 自己紹介
- f 教員による紹介

	該当する番号に○をつけてください	
	1年	2年
a	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1
b	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1
c	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1
d	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1
e	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1
f	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1

この他に知りたい情報がありますか
自己紹介票についてご意見がありましたら書いて下さい

② 実習課題の内容や書き方について該当するものに○をつけて下さい (複数回答可)

- a 実習に取り組みたいことが表現されているので随時指導に活用している
- b 実習フロアの決定などに活用している
- c 各学生の実習予定表の作成に参考になっている
- d 本人自身の意識の問題なので指導には活用していない
- e 学校側の学習目標との関連性がないものもありどちらを優先するのか指導しにくい
- f 学生の実習への率直な気持ちが分かりにくい
- g 簡潔に、分量的にも半分からいに表示させてもよいのではないか

	1年	2年
a		
b		
c		
d		
e		
f		
g		
h		
i		
j		
k		

<資料5-②>

- h 課題、理由、行動目標に分かれていて分かりやすい
- i 課題、理由、行動目標に分かれていても内容が混同していて分かりにくい
- j 裏表の両面使用は使いにくい
- k その他日頃感じていらっしゃる意見や課題で知りたい事柄など書いて下さい

II 実習前に学習して準備をして来てほしいと思っていることなどをお聞かせ下さい

回答基準 3ー強く思う 2ーそう思う 1ーそう思わない

① 挨拶・返事・態度・言葉遣いなどの社会的常識の学習について 該当する番号に○をつけて下さい

	1年	2年
①	3 2 1	3 2 1

特に気になることなどありましたらお書き下さい

② 基本的な介護技術等についての学習について

- a コミュニケーション (言語的、非言語的)
- b 水分補給
- c 食事介助
- d 排泄介助
- e 移乗介助
- f 衣の着脱介助
- g 入浴介助
- h 整容介助
- i シーツ交換と環境整備
- j 掃除

	該当する番号に○をつけてください	
	1年	2年
a	3 2 1	3 2 1
b	3 2 1	3 2 1
c	3 2 1	3 2 1
d	3 2 1	3 2 1
e	3 2 1	3 2 1
f	3 2 1	3 2 1
g	3 2 1	3 2 1
h	3 2 1	3 2 1
i	3 2 1	3 2 1
j	3 2 1	3 2 1

③ その他、実習前準備としてお考えがありましたら書いて下さい

〈資料5-③〉

III 実習の進め方や指導方法について

- 1) 次のa、bについて該当する番号を□のなかから選んでください(複数回答可)
- a 実習開始1～2日目から経験させている援助技術項目(業務)はどれでしょうか
- b ある程度実習が進んでから経験させている援助技術項目はどれでしょうか

	1年	2年
a		
b		
その他		

- ① コミュニケーション ② 水分補給 ③ 食事介助 ④ 排泄介助 ⑤ 移乗介助
⑥ 着脱介助 ⑦ 入浴介助 ⑧ 整容介助 ⑨ シーツ交換 ⑩ 環境整備 ⑪ 掃除

2) 該当するものに○をつけてください

- c 実習期間の長短やレベルに合わせて経験項目を考慮している
- d 学生の課題に沿った実習が出来るように経験項目などに配慮している

	1年	2年
c		
d		

3) 次の二組のうち、どちらかを選び○をつけてください

- A 学生の目標の伝達や調整などで、朝必ず担当者で打ち合わせを行っている
- B 学生の目標の伝達や調整は、状況によって聞いたりするが聞かない時もある
- C 実習フロアは、多くの利用者に接してもらえるよう特にフロアを決めていない
- D 実習フロアを決め、実習の全期間、決められたフロアの利用者と接することが多い
- E 日々の実習指導者は、寮父母等で交代し担当している
- F 日々の実習指導者は、何人かの寮父母が交代で担当している
- G 実習予定表には、寮父母の業務(間接業務も含む)を一通り知ってもらうため、実習最終日まで経験できるようにしている
- H 実習予定表を作成しているが、学生個人々の状況にあわせて内容に変更している
- I 介護技術をもっと経験できるように予定表を立てている
- J 利用者とのコミュニケーションの時間が多く持てるよう予定表を立てている

	1年	2年
A		
B		
C		
D		
E		
F		
G		
H		
I		
J		

〈資料5-④〉

【以下2年生の実習を受け入れている施設のみご回答下さい】

- K 介護計画について立案内容などの発表の場を設けたりし、必要に応じて指導している
- L 計画について質問や意見を求められた時に指導している
- M 介護計画のために対象者の情報収集や実施のための時間を与えている
- N 日々の実習プログラムの中で情報を集め実施しているので、特に時間を与えていない

	1年	2年
K		
L		
M		
N		

IV 実習記録について該当するものに○をつけて下さい(複数回答可)

〈日々の活動記録〉

- a 記録の時間を毎日与えている () 分
- b できるだけ早く(3日以内位)学生に返すようにしている
- c コメントの記入に時間が取られ、苦痛を感じる
- d 学生の記録を読む時間がない
- e 記録のコメントよりもその場その場の指導に重点をおいている
- f 本日の行動目標に具体的な表現がなかったり、状況に合っていない場合が多い
- g 実習内容欄が項目の羅列が目立ち中身が記述されていないことが多い
- h 実施内容の記述が多く考察に深みが足りない
- i 比較的よく書けている

	1年	2年
a	()	()
b		
c		
d		
e		
f		
g		
h		
i		
j		
k		
l		
m		

〈関わりの記録〉

- j 状況描写など書き方が分かりにくい記述になっている
- k 考察欄で学生自身の言動と利用者の様子など関係性を振りかえっての気付きが書かれていない
- l 比較的よく書けている
- m その他 記録について自由に書いてください

お忙しいなか、ご協力ありがとうございました

〈資料6〉

自由記述

I-① 個人紹介票の項目の有効性

- 参考になっているが、自己紹介の記入が簡潔過ぎる傾向あり
- 教員による紹介の内容が多いと、指導する側が学生を把握しやすいと思う
- 実習場所にあった紹介が欲しい。特養ならば祖父母と住んでいて面倒見が良いなど
- 学生自身の自分の長所と短所など個性がわかると指導に活かしやすい
- 長所・短所についての記入もあるとよい
- 自己紹介欄に自分の長所、短所等、自分をどのように評価しているかが分かると良い
- 職歴がある方は、簡単に書いてほしい
- 簡単な履歴
- 貴校に入学する前に卒業している大学(専門学校)が職歴があればあった方が参考になります
- 学習態度や学習能力についての記述②
- 学力(学校内における各教科の成績等)
- 宿泊なのか、通園するのか明確になっていてとありがたいです
- 本人が福祉を勉強したいと思った動機やきっかけ
- 施設の給食を利用する場合食べ物アレルギーの有無、その他疾病等がある場合②
- 介護技術で行ったもの・行っていないものが分かると技術実習の予定が立てやすい(洗身の介助など)
- 作成時点での福祉に関する知識・技術の認知度が分かると予定が立てやすい
- 役立っているのでは今のままで良い
- 他校に比べ、自己紹介票に盛り込まれている情報が充実しているのでは非常に助かっている。できれば、実習目標もこの中に入れてもらえるとありがたい
- 今回の実習で、行いたいこと(学びたいことなど)を記入していただくと良いのでは
- 実習先でどのようなことを学びたいのかなど
- 自己紹介票の項目に学生が一番どんな援助をしたいのかという希望を記入してもらえたらと思います
- くるめ園では、実習に来た学生に行事などのときボランティアを頼むことがあり、連絡場所がわかれば助かります
- 個人紹介票を全ての参考にしています。裏表もとてもよいです。2枚よりは。評価表が先に送られるのではなく、実習の一週間前には個人票の到着を希望します
- 実習の際の本人の意欲が一番大切だと思うので、目は通しますがあまり参考にはして

ません

I-② 実習課題の内容や書き方

- 学習目標が1日の目標に活かされていない
- 時々、課題が本人にとって過剰ではないかと思われることがあります
- 学校側の学習目標が少し高いように思う。行動目標を進めて行くのは学生それぞれの力によると思われる
- 実習課題に学生がとられすぎるケースが見受けられる。日々の具体化では施設側が出しているテーマとの“ズレ”が生じたり、学生が無理に狭く見えてしまうことがある。施設や障害者の何を知っているのか、事前の学生との確認が重要と考える
- 作成時点での福祉に関する知識・技術認知度。指導予定や担当者を予め決めておきやすい。現時点では初日のオリでの反応を見てから急いで予定を立てている状態
- 実際に実習する内容とかけ離れてしまっている場合もあり、1年生(初めての実習)の場合は、内容をもっと簡潔に絞っても良いと感じる
- 2年生については、もう少し具体的な課題を持って実習に望めるような指導・記入をお願いしたい
- 具体的な内容や理由をしっかり記入してもらえると指導しやすい
- 実習中これだけはやりたいというものを小さいことでもいいので具体的に書いて欲しい
- 具体的に目標を書いて頂くほど指導しやすいし、良い環境も提供できます。……をやりたい。……を学びたい。体験したいなど。苦手なことを教えてもらえると良い
- そこに書かれている内容を学生がどれだけ意識して実習できるかが問題
- 特に行動目標は具体的に示されており、指導上それを踏まえて対応できず難しいです
- 学生がどの程度、どんなことを学ぶべきなのか理解が必要ではないか
- 実習のまとめで話したような福祉を志す契機について触れてほしいと思います。初心をふまえて介護に取り組んでもらうために
- くるめ園では学んでほしい内容があり、それをもとにカリキュラムを組んでいます。そのカリキュラムの中でどのように達成しているのか記録を見ています
- 両面を使用する場合は、裏表にも日付、名前が記入できる場所があるとよいと思います

II-① 挨拶・返事・態度・言葉遣いなど社会的常識

- 共卒の学生は基本的なことではできていると思います
- 常識については出来る学生と、出来ない学生がはっきりしている様思う
- 社会的常識のない学生は利用者との関わりも悪く信頼関係も出来難い様思う
- 技術面はできなくともこの部分は見られているので大切

- ・介護を教える前に社会的常識を指導する方に時間を費やす方が多い
- ・常識的なことだけは最低限できていないと困る(最後の挨拶回りなども)(3)
- ・近年、どの学校もレベルが下がっている状況にある。再度、事前学習の徹底をお願いしたい
- ・学習して身に付けることではないが、最近の学生には必要のようである
- ・いわゆる、しつけ一般のこと。特に身のこなし(一連の動作のスムーズさ)に欠けています
- ・時間厳守が守られないことが多々ある
- ・言葉遣いの乱れ、実習生としての態度が悪い(常日頃からの指導を望みます)(4)
- ・長い実習では職員や利用者に対して馴れ馴れしくしてしまうのは残念
- ・2年生の方が言葉の乱れなどを感じる(施設や実習の慣れからか)
- ・挨拶や言葉遣いなどを、実習中に1から教えた学生も過去にいました
- ・ブスツとして挨拶する。笑顔が欲しい
- ・園内でのすれ違い様の挨拶・会釈がこちらから声を掛けられないとできない学生が多くなってきた(他校も含めて)
- ・挨拶の出来ない学生が年々多くなってきている(指導を望む)(3)
- ・基本的なことが出来ない学生が多くなってきている。大きな声ではっきりと挨拶ができるくらいは常識では。利用者とも声が小さい(2)
- ・人間として挨拶、返事等は当たり前のこと。きちんと身につけてほしい、返事もできない学生がいる
- ・服装、返事など(短パンなどで気になった)(2)
- ・実習時の服装、靴を見てほしい。高校のときに使用していたジャージが切っただけであったり、チェックがわざと取られていてだらしない感じがなく見えます
- ・服装、ヘアスタイル、ピアス等のアクセサリが2年生になると多くなる(2)
- ・服装(ズボンの丈が長すぎるので不衛生)ピアスは相手を傷つけない程度のものに
- ・他の人に通じない挨拶は挨拶ではない。声が小さい、覇気が感じられない
- ・職場に入るようになるので社会意識を持ってきてもらいたい(社会の厳しさへの心構えを)(2)
- ・実習を受ける心構え、やる気をもっと伝わってくるとうまい。おとなしい(2)
- ・勉強に来ているという意識が足りないことが多い
- ・学生らしい態度で実習に臨んで欲しい
- ・将来の仕事に対して積極的に行動して欲しい
- ・生活の場であることを意識して欲しい(人権に対する意識)(2)
- ・返事はするものの実際に理解しているのかが。説明したり実演しても行っていない

学生の实習に対する姿勢が大変だと思います。

- ・実習前に習得する必要はないと思う。むしろそれらを学ぼうとする姿勢が大切だと思う
- ・自分自身で考えたり、調べたりできるように意識づけを
- ・a～jの方法よりも、それらの意味を学んでほしい
- ・何故そうするのかといったところから理解する必要がある。施設の役割もあると思うが
- ・学校で学んだことを踏まえ施設で実習した中での相違点を考えて欲しい
- ・実習で始めて習うという姿勢でなく授業で習ったことを実らせるという気持ちが必要だと思う。そうすると応用が身につきます
- ・施設は応用を教える所だと考えています
- ・介護に関しては学校の知識で充分。出来ると思っていないし、教えるのがこちらの役割なので。逆に掃除などは基本的なことでも教えるまでもない状態です
- ・技術的な問題よりも、施設というところを知ろうという気持ちを持ってほしい
- ・2年生には気持ちの準備とそれなりに学習してきて欲しい
- ・特養と老健の違い、介護保険について、感染症対策など知識を実習前に必ず(2年生でも分かっていない人がいる)1年生の実習はこの意味では秋～冬が良いと思う。安全・事故防止に対する意識
- ・危険を想定してどのような時に危険が及ぶかなど話し合いを持ってもらうと実習が良いものになる
- ・コミュニケーション手段が一番やすいのが「会話」だと思います。「何を話したらよいかわからない」という方が多いです。日常的・社会情報等や出来事等、話題がスムーズに出るように、また、年齢差が多い年上の利用者の方々と接することを頭に入れてきていただけると、現場で「困った」が減ると思います
- ・年寄りがどんな話しが好きか、歌が好きか考え話しがスムーズ
- ・コミュニケーションでは今のことを話すのではなく、利用者へ添った会話で楽しませることを学んで欲しい
- ・自分が何をしたいのか、何を学びたいのかを明確にして実習に望んでもらいたい
- ・何故実習するのか、どういう気持ちと態度で実習したら良いか整理して臨むことが必要
- ・頑張ろうと意欲を高める。まずは、実習の心構えと自覚をして臨んでほしい
- ・こちらから指示をしないとコミュニケーションすら取れない学生もいる。積極性、学ぶ意識、考える力がもう少しあっても良いのではと思う
- ・プライバシー
- ・施設外での車椅子体験等、段差や人ごみの中での利用はどうでしょう
- ・周りを見る眼力を養ってほしい
- ・一般的服装と常識。今年度は1学年からとても良識がありました

- ・説明しているのに毎日の担当指導者と連絡を取らない(探したり聞きに行くことをしない学生が結構いる)
- ・職員に聞かずに実習生一人で判断し、利用者にかかわることがあるので、全て職員に確認してほしい
- ・施設内の実習生のために講義をしているときや会議中、居眠りする学生が時々います。実習をさせていただくということ・態度が全体的にかけています
- ・集中心、積極性、このことを徹底してほしい。説明での居眠り厳禁
- ・文章(ですます調でそろえる、誤字脱字の見直し等常識の範囲)
- ・実習ノートの記入の仕方(文集の記入方法、要点を押さえた記入の方法)
- ・実習の日数が経つにつれ、言葉遣いや態度が乱れてしまったり、利用者へ友達感覚になってしまうことがある
- ・実習＝学ぶと言う意識が薄いのか、普段と変わらない友達感覚で入居者に接している実習生がいるのも事実です。気がついたら声はかけているのですが、本人にその自覚が内容で、なぜ注意されているのかわからないみたいですし
- ・事前に、質問する内容は準備しておいても良いと思う

II-③ 実習前準備

- ・健康管理(2)
- ・授業のおさらいと記録の書き方(2)
- ・介護技術は利用者によって変わってきますので、基本となることを学習し、頭に入れて実習に望んでいただけると、より有意義な実習になると思う
- ・1・2年生ともに学習する内容に違いはありますから、一概に②のみとも限りませんが基本が分かればあとは施設のやり方などあるので良いと思う
- ・全ての介助において基本的な部分くらいは頭に入れておいて欲しい(特に2年生)
- ・基本的なことは理解できた状態で実習に来て欲しい。(運転免許仮免路上教習のようなものと考えて)(3)
- ・介護技術は多少頭に入れておいてだけで実際現場で実習で良いと思います
- ・園で要求される介護技術は利用者個人に特化していますので、一般論的な技術では対応できないかもしれませんが、原則的なことだけは理解してほしいと思います
- ・介護技術については、学生の個々の能力に対応して施設が責任を負うものであると思うので、その習得度合いの差異はあまり気にしていませんが、「考える」「哲学」いわゆる福祉倫理や「やる気」「意欲」いわゆる実習に対する「姿勢」の部分、専門用語等の知識は最低限学習させていただきたい
- ・1年生に関しては、入学して間もないので、介護技術については難しいと思いますので、

- ・学校側が関与することではないと思いますが、学生自身の生活習慣について改められるところは改めてもらうような努力を促すことができるものではないかと(例えば朝食をきちんととることなど)
- ・技術面の学習というより、挨拶・言葉遣い等の基本を身につけていない学生が多く見受けられる
- ・掃除において、水モップを持ってただ床を往復するのではなく、なぜ掃除をするのか、その目的を前もって考えて行ってほしいと思います。(基本的なことですが、汚れが回かこすらないと落ちないし、施設は生活の場であることなど)

IV 実習記録について

- ・その日の目標を記入しているのに目標を忘れていることがある。意識が低いと思う
- ・誤字脱字が目立つので辞書を使って記録すべき。丁寧に(4)
- ・誤字脱字や言葉の表現の仕方についてもっと気をつけていただきたい
- ・利用者の名前を書くとき、本名を書いていたことが気になった
- ・口語体であることが多い
- ・記録に現代用語「まったり」とか「バニクッテ」を書くのをやめて欲しい。
- ・毎回必ず自分が思ったこと、考えたことを記入し、疑問、質問を投げかけてほしい
- ・日々の活動記録を毎日書いているので、頑張っていると感じます
- ・記録の意味、記録の使い方等を理解してできるよう、実習前指導を望む
- ・何のための記録か、その意味を良く考えてもらいたい
- ・人にもよるが、毎日の記録が単調になって本人のためにならない。ただ提出するためのものかと思うことがある
- ・学生にも差があり、良く書ける人もいれば何をしたのかの記述のみになってしまっている人もいます
- ・細かく書いている人もいますが、そうでない学生も多々あります
- ・日誌は記録であり、自分の日記ではないことを十分に学習しておいてください
- ・関わりの記録の書き方の理解が浅いようです
- ・記録は客観的に書けるように、ご指導していただけると良いと思います。話し言葉をそのまま書いている方や文章がまとまらない方もいました。現場に出て行くと、ケース記録等作成するようになりますが、そのときの練習にもなると思います
- ・一生懸命書くこととする意欲が旺盛で、頭が下がる思いですが、逆にもっとシンプルに、ポイントの一つに絞っての記述でも良いような気がするときもあります。同じ理由でコメントの記入もそのほうが書きやすいですね(いずれにしてもコメント記入はプレッシャーです)

介護実習指導のあり方を探る

- ・考察が余りなされていない。日々の目標に対する反省・考察が足りない。日記のような内容が多くコメントに困る(3)
- ・小さい事でもたくさん書いて欲しい。やった内容よりも、感想、考察、反省を
- ・自分の目指す理想の福祉があれば、介護方法についての提案があってもいいはず。何も考えていないのかがわかります
- ・日々の記録とかかわりの記録に同じようなことを記入(考察)している学生がいます。ご指導をお願いします
- ・取り上げた理由をもっと明確に書き、かつ状況も会話のみだけでなく、周囲の環境や相手の反応、自分の感じた心情等を詳細に書いてくれると分かりやすいし、コメントし易い
- ・社会人として現場に立ったとき振り返る材料になるので、どのように感じたり関わったかを書くともますます良いと思う
- ・当苑では、記録も大切な実習内容の一つと考え、内容・記入方法等のについても指導しています
- ・施設職員のほうでは、記録の指導までに時間を費やせないのが実状と思われれます。巡回日に担当の先生で指導していただくと助かります。施設のフォローとしては、毎日反省会を実施して対応しています
- ・当施設のコメントは、入居者が毎日行っている“反省会”で、実際に介助を受けている側からの注意点、意見等を実習生に記録のコメント欄に記入してもらっています。もちろん、記録を読んで職員からのコメントもあります
- ・記録は必ずその日のうちに返しています。コメントは動きに対して振り返るものにしたので、気をつけて複数の職員が記録するようにしています
- ・その日の勤務終了時に、必ず15分程度の反省会を行っている。記録のコメントについては遅れがちになるため、反省会を重視しています
- ・鉛筆が薄くて読みづらい。ペンか、鉛筆かに統一して欲しい
- ・その日の行動目標と具体的な計画がタイムテーブル式になっているために書きづらい様子なので、最上欄に書く様に度々指導しました
- ・関わりの記録や介護計画の提出が最終日近くや実習終了後になることが多いので、早めの記入提出をお願いします
- ・記録のことではないのですが、実習は現場そのものを知る唯一の学習の場だと思います。利用者から学べることは大変大きく大切だと思うのですが、利用者向き合う実習生が本当に減りました。それが残念です
- ・重度の障害者の生活の場なので、どうしてもカリキュラムは介護中心になってしまっていますが、介護技術よりも、利用者への理解や利用者を取り囲む状況等学んでほしいと思

- ます。それには、利用者と接しなければならないと思うのですが、会話している学生の姿は本当に減ってしまっているようです
- ・学生により相当レベルにバラつきがあるので、上記アンケートには丸をつけませんでした。申し訳ありません